

目の前の大地震テレビ中継

近年日本各地で大きな地震が頻繁に発生し、いずれ近い将来首都圏でも地下直下型大地震が起きると予測され内心穏やかではいられない。

1999年8月17日、トルコ北西部を襲ったイズミット地震はマグニチュード7.6を記録し、その犠牲者の数は1万7千名（一説には4万5千名と言われる）を超えた。その翌日古代ギリシャ時代のトロイ遺跡見学を楽しみに近くの古都チャナッカレに滞在中の深夜、突然大きな揺れがきた。その大震災からトルコを離れるまでの1週間、トルコ国内はどこも壊滅的な災害の復旧作業のため上下への大騒ぎで、交通もしばしば遮断される有様だった。

イスタンブールへ戻ると賑やかなホテル周辺も瓦礫を除去するためのクレーン車がひっきりなしに往来し、その騒音は夜になっても止むことがなかった。近代的な高層ビルが次々に倒壊した一方で、中世伝統のイスラム教会モスクや、ミナレット塔はびくともしなかった。避難したテントからはみ出し雨に打たれて泥まみれになった豪華なトルコ絨毯も、洗えば元に戻ると人々は気にもしていなかった。

ホテルの部屋からぼんやり外の倒壊した建物を見ていて、何気なくNHK・BSテレビにスイッチを入れた途端、そこに映し出された画像が外の惨状とまったく同じだと気がついた。ホテルの前では、何と日本人レポーターがちょうどマイクを持ち現場の状況を実況している姿が見えるではないか。荒廃した現場のテレビ画像は、一旦地震現場から日本へ衛星で送られ、即座にUターンされてイスタンブールで放映されたのだ。レポーターと同じ目線で地震現場の破壊された状況を見つめながら、テレビから聞こえるレポーターの声に耳を傾け、まるで4次元の世界に浸っているような気分だった。

20世紀最後の大地震のせいで滅多に味わえない臨場感たっぷりの体験をさせてもらった。